

西洋薬とすみ分け 医療費抑制は可能

Q 医療の現場では漢方薬を一般の医薬品（西洋薬）とどのように使い分けているのでしょうか。西洋薬に上乗せする形で使うなら医療費の無駄では？。

A 医療現場で西洋薬と漢方薬をしばしば併用しているのは事実である。医療機関の七割近くが既に漢方薬を日常診療に導入している。そして、併用してはいけない場合も含め、漢方薬と西洋薬の得手・不得手とする分野が次第に明らかになってきている。

例えば抗がん剤と漢方薬の併用のように、ターゲット臓器に対する治療として作用の強い西洋薬を、全身状態の改善や西洋薬の副作用の予防・軽減を漢方薬でといった具合に「すみ分け」

をしつつある。

大きな曲がり角にある日本の医療制度で総医療費をどう抑制するかという問題は重要である。この点、最近の漢方治療の医療経済学的評価は注目に値する。例えば、かぜを漢方薬のみで治療した場合と西洋薬で対症療法をした場合を比較した結果、漢方薬を使った方が治癒にいたる日数も費用も少ない。肝硬変の治療費用を西洋医学的治療のみと漢方治療を併用した場合で比較したところ、漢方併用の方が低コストになるという推計もある。

高齢化社会になり一人で種々の病気をかかえる人が増えている。常に「全身を治す」という漢方の考えは合理的であり、社会的ニーズでもある。従って医療費の無駄にはあたらない。